

二〇一九年度秋季企画展

「進取の精神の実践者——同志社から来た教員たち」

廣 木 尚

二〇一九年度秋季企画展は「進取の精神の実践者——同志社から来た教員たち」と題し、大西祝、浮田和民、安部磯雄という、東京専門学校（現慶応義塾大学）の創立後一〇年ほどの間に相次いで着任した同志社出身の教員たちに焦点をあて、展示を行った。

会期は二〇一九年九月二十七日から十一月三日までの約一ヶ月間で、会場は早稲田大学歴史館企画展示ルーム（早稲田キャンパス一号館一階）であった。期間全体で二〇五六名の来場者があった。

本展示会開催に当たり、ご協力をいただいた同志社大学同志社史資料センター、早稲田大学図書館ほか関係機関・各位に、あらためて御礼を申し上げます。

以下、主な展示資料を紹介しつつ、企画展の内容を説明したい。なお、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学学術資料センター所蔵の資料である。

2019年9月27日^{Fri} - 11月3日^{Sun}

開館時間 10:00 - 17:00 (休館日) 10月2日、22日、23日、30日、11月1日

会場 早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

主催 早稲田大学大学史資料センター

【お問い合わせ先】
早稲田大学大学史資料センター Tel. 042-451-1343
www.soda.jp/culture/archives/

入場無料

進取の精神の
実践者

同志社から来た教員たち



早稲田大学

大学史資料センター 秋季企画展

進取の精神の実践者

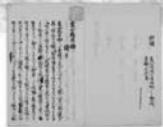
2019年9月27日^{Fri} - 11月3日^{Sun}

開館時間 10:00 - 17:00 (休館日 10月21日、22日、29日、30日、11月1日)

精神の自由を求め時代と格闘した実践者たちの軌跡

同志社で学び、早稲田で教鞭をとった大西祝、浮田和民、安部磯雄。創立まもない東京専門学校（現・早稲田大学）に相次いで着任した彼らは、哲学、政治、歴史等を幅広く講じるかたわら、教場の外でも様々な社会実践に取り組みました。その意志は教え子たちへと受け継がれ、早稲田はデモクラシーの時代を迎えることとなります。強まる国家主義の風潮に抗い、精神の自由を擁護した彼らの足跡をたどり、校歌に謳われる「進取の精神」が育まれた時代に迫ります。








- 1 安部磯雄、大隈重信と練兵会の学生連(1907年)
- 2 『太陽』第15巻第10号(1909年7月号)
- 3 大西祝「良心私軍論」草稿(1890年、早稲田大学校首創時書)
- 4 浮田和民演説メモ「日露戦争と教育」
- 5 安部磯雄演説メモ「露中開議 農村問題」
- 6 朝岡貫一書簡(浮田和民宛(1925年7月19日))

会場 早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

交通案内

- 東京メトロ東西線「早稲田」駅 徒歩7分
- 京電荒川線「早稲田」駅 徒歩5分
- JR山手線・西武有楽町線「池田高島町」駅(早稲田口)から徒歩15分(早稲田門)行徒歩2分

主催 早稲田大学大学史資料センター

お問い合わせ先
早稲田大学大学史資料センター
Tel. 042-451-1343 www.waseda.jp/culture/archives/




はじめに

一八八二年、東京専門学校（のちの早稲田大学）は、大隈重信の庇護の下、小野梓と彼らの下に集った東京大学出身の若者たちを中心に創立された。当初は様々な困難にみまわれた学校経営も、一八九〇年代には安定軌道に乗り、早大は発展期を迎えることになる。

ちょうどその頃、この学校に背景を異にする一群の学者たちが相次いで着任した。大西祝・浮田和民・安部磯雄ら同志社出身の教員たちである。新島襄のもとでキリスト教主義の教えを受けた彼らは、実学的な社会科学が主流だった早大に、哲学的・倫理的思考に裏打ちされた精神性をもたらしした。

他方、キリスト教に帰依しつつも伝統的な教義に飽き足りなかった彼らは「思想の点ではあくまでも自由で、いかなる異主義の人を容れて、少しも干渉はしない」（坪内逍遙）早稲田の中で、その思想を存分に開花させていった。欧米の最新思想を身につけた彼らの新しさと、彼らを受け入れた早稲田の気風、それが相まって、校歌に謳われる「進取の精神」が育まれていったといえる。自由と平和を尊び、貧困や様々な抑圧に抗い続けた彼らの活動を土台に、20世紀初頭の早稲田は、大正デモクラシーの発信地として、その名を高めていったのである。

かつて、新島襄が同志社の経営のため病身をおして奔走していた時、大隈重信は彼に手を差し伸べた有力な支援者の一人だった。その同志社で育まれた思想家たちが、まわりまわって早稲田に新しい風をもたらししたことは、奇縁といえるかもしれない。

現在、大西祝の遺した史料の多くは本学の図書館に、浮田和民、安部磯雄の資料は大学史資料センターに所蔵され

ている。そのいくつかを紹介することで、彼らの精神を受け継いでいく決意を新たにしたい。

【主な展示資料】

【写真】 大隈重信（一八三八～一九二二）

【写真】 新島襄（一八四三～一八九〇）／同志社大学同志社史資料センター所蔵

【写真】 同志社教員時代の浮田和民（一八九四年）

【写真】 同志社教員時代の安部磯雄

【写真】 同志社旧友会（一九四〇年四月二〇日）

浮田和民の縁戚で早大維持員の原安三郎（一九〇九年商科卒）宅で撮影されたもの。原夫妻とともに安部磯雄、浮田和民、徳富蘇峰らが写っている。

明治専門学校設立旨趣（一八八四年五月）

一八七五年、京都に同志社英学校を設立した新島襄は、八〇年代以降は同校の「大学」化に向けて活動した。新島と山本覚馬を発起者とするこの文書では、校名を「明治専門学校」とすること、キリスト教道徳に基づく教育を施すことなどが説かれている。一八八八年九月、予定校名は「同志社大学」に改められた。

しかし、一八九〇年に新島が死去するなど、その活動は様々な困難にみまわれ、正式な開校は一九一二年まで持ち越されることになった。

新島襄書翰大隈重信宛（一八八八年七月一〇日）／早稲田大学図書館所蔵

新島が当時外務大臣を務めていた大隈に宛てて、明治専門学校設立の後援と、井上馨、岩崎弥之助ら賛同者を集めた会合の開催を依頼したもの。条約改正方針などをめぐり疎隔もあった大隈と井上だが、新島の構想にはともに賛意を示した。会合は七月一九日、外相官邸で行われ、出席者より寄付金の申し出がなされた。大隈も一千元を提供している。

一・大西祝（一八六四～一九〇〇）

大西祝は、備前国（現・岡山県）に岡山藩士・木全正脩きまたの子として生まれ、後、親戚の大西家を継いだ。親類にはキリスト教徒が多く、伝道に訪れた金森通倫ら同志社関係者とも交流があった。

一八七七年、同志社英学校に入学、神学のほか欧米の最新の学問を学び、たちまち秀才ぶりを発揮する。入学翌年には新島襄より受洗しクリスチャンとなった。同志社では徳富蘇峰や浮田和民と知り合い、終生にわたる親交を結んだ。

一八八五年、東京大学予備門に編入、抜群の英語力は後々まで語り草となった。東京大学（後の帝国大学）を大学院まで進み、哲学・倫理学を専攻した。

大学院在学中の一八九一年九月、前年開設したばかりの東京専門学校文学科講師に就任。以後、一八九八年まで坪内逍遙とともに早大文科の礎を築いた。

カントやマシュー・アーノルドの影響のもとに形づくられた大西の思想は「批評主義」とも呼ばれ、全ての事柄に

対して理性に基づいた徹底的「批評」を行い、確実なものを見極めた上で「建設的」な思想を打ち立てようとするものであった。この方法により大西は倫理の根源的基盤を究明、自身が信仰するキリスト教についても、厳密な教義にとらわれない斬新な解釈を行った。

大西の「批評主義」は専門以外の分野でも發揮された。帝大在学中より評論活動を開始した大西は、宗教・芸術・教育から政治的時評に至るまで幅広い分野を論じ、なかでも一八九〇年代初頭の「教育ト宗教ノ衝突」論争では、国家主義的論調が優勢となる中で、思想・良心の自由を果敢に擁護した。

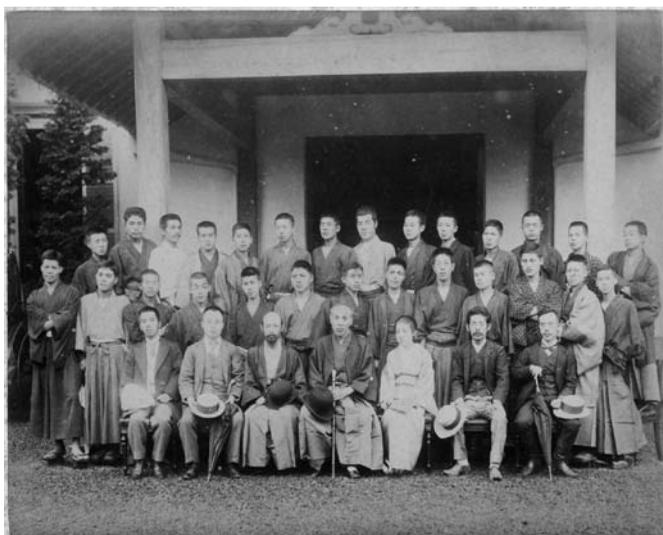
その他、『哲学会雑誌』『六合雑誌』等の編集を担い、一八九七年には姉崎正治・浮田和民・岸本能武太らと丁酉懇話会（後の丁酉倫理会）を設立するなど、論壇や学界の基盤づくりにも貢献した。故郷の山に因んで「操山」と号し、和歌や新体詩の創作も手掛けた。

一八九八年、文部省の命を受けドイツへ留学。留学中、新設予定の京都帝国大学文科大学長に内定したが、研究に没頭するあまり病となり、翌年、帰国。一九〇〇年一月、再び教壇に立つことなく、三六歳の若さでこの世を去った。

大西祝肖像（製作年不明）／早稲田大学図書館所蔵

大西祝 [My Future Profession]（一八八五年六月一日）／早稲田大学図書館所蔵

東京大学予備門時代の試験答案。英語で書かれたこの答案で、大西は、世の人は哲学が何の役にたつのかと怪しむが、自分は日本の教育を前進させるために哲学を職業とするのだ、それが幼少からの大きな夢だ、と述べている。



【写真】大隈重信夫妻、大西祝と文学科卒業生（一八九六年七月）

文学科校舎前で撮影されたもの。前列右端に大西祝を、中央に大隈重信・綾子夫妻を写す。

大西祝『倫理論文 良心起原論』草稿（一八九〇年頃）

／早稲田大学図書館所蔵

帝国大学大学院時代に卒業論文として準備されたもの。人間の良心の起原とその展開過程を考察している。大西はおよそ一五年にわたり推敲を重ね、この論文を書き続けたが、生前、ついに完成させることはできなかった。大西の未完の主著である。

大西祝講義ノート『History of Aesthetics Ⅲ』／早稲

田大学図書館所蔵

「美学」の講義ノート。東京専門学校での大西の担当科目は、他にも哲学史・論理学・倫理学・心理学など多岐にわたった。

大西祝講義ノート『西洋哲学史』（断片）／早稲田大学図書館所蔵

教壇での講義をもとに、大西は一八九五年から九七年にかけて東京専門学校通信講義録に『西洋哲学

史』を掲載した。執筆にあたっては、大西の口述を、教え子の綱島梁川と五十嵐力が筆記し、それにさらに大西が手を加えたという。その後、改訂を経て一八九九年に単著として完成した。日本初の本格的な西洋哲学史として知られている。

「教育ト宗教ノ衝突」論争

一八九〇年の教育勅語で国家の教育方針が方向づけられると、唯一神と普遍的倫理への帰依を説くキリスト教は、天皇制を絶対視する教育勅語と対立するとみなされるようになる。翌年、キリスト教で第一高等中学校教員の内村鑑三が、教育勅語への最敬礼を行わなかったとして職を追われる事件が発生すると、キリスト教への攻撃は一段と激しさを増した。

なかでも、攻撃の急先鋒となったのが、帝国大学で大西の指導教官だった井上哲次郎である。井上は「教育と宗教の衝突」（一八九三年一〜二月）など多くの論説を発表、キリスト教を反国家的だときめつけると、彼の主張に国家主義者や儒学者、仏教徒らも呼応した。対するキリスト者たちも積極的に反論し、一年以上に及ぶ論争が繰り広げられた。

しかし、キリスト者の反論の多くは、キリスト教と天皇制や国家主義は矛盾しないとする弁護的なものであり、かえって、教育勅語の不可侵性を強める結果をもたらした。この論争以降、日本における信教の自由は限定的な範囲に狭められていった。

そのような中、大西祝は、キリスト教への攻撃は「進取」の思想を拒絶する「保守」性の現れだとし、教育勅語を絶対化する傾向を批判した。かつての師である井上たちを相手に、大西は「断頭台上の露と消ゆるとも其信

ずる所を[※]迂く可からざる」(「当今の衝突論」)との覚悟で立ち向かい、思想・良心の自由を擁護した。

【写真】井上哲次郎「教育と宗教の衝突」(『教育時論』二八九号、一八九三年一月)／早稲田大学図書館所蔵

井上哲次郎『教育と宗教ノ衝突』(敬業社、一八九三年四月)

論争を受けて、井上が発表済の論稿も含め、改めて自説をまとめたもの。井上はキリスト教の博愛主義と、教育勅語の国家主義的精神は相容れないとした。

大西祝「当今の衝突論」(一八九三年六月)／早稲田大学図書館所蔵

『教育時論』二九五、二九六号に掲載。この論説で大西は「教育と宗教ノ衝突」論争を、キリスト教対国家主義の対立と見るのは誤りで、「進取と保守との衝突」こそが対立の本質だとした。その上で、大西は、キリスト教のよ^ろうな「新精神」を受け入れる姿勢こそが、日本社会の利益につながると強調した。

五十嵐力「大西祝先生を祭る文」(一九〇〇年二月八日)／早稲田大学図書館所蔵

日本文学者で後に早大文学部長をつとめた五十嵐力(一八九五年文学科卒)による大西への弔辞。大西の指導学生には、五十嵐のほか、金子馬治、中桐確太郎、紀淑雄、島村抱月、綱島梁川、朝河貫一ら錚々たる人物が並んでいる。

二、浮田和民（一八六〇～一九四六）

浮田和民は、一八六〇年、肥後国（現・熊本県）に熊本藩士・栗田直之（後、浮田と改姓）の子として生まれた。幼名・亀雄。一八七一年、熊本洋学校に入学し、L・L・ジェーンズの薫陶をうけた。一八七六年、花岡山盟約に参加しプロテスタントに改宗、徳富蘇峰らとともに「熊本バンド」の一員となる。熊本洋学校の閉鎖に伴い、同年、同志社英学校に転校した。

同志社卒業後の一八八〇年、大阪天満教会会頭に就任するが、伝道よりもジャーナリズムでの活動を志望し、八二年、辞任。以後、『七一雑報』『六合雑誌』『東京毎週新報』等の編集に携わった。信仰から次第に距離を置き、キリスト教のほか、多様な教えに共通する普遍的倫理を探索するようになる。

一八八六年、新島襄に招聘され母校・同志社の講師に就任。在職中、一八九二年から九四年までアメリカ・イエール大学に留学した。キリスト教主義の学校にあつて、非宗教的普通教育の推進を主張、二代目社長・小崎弘道を補佐して学校改革に取り組んだが、宣教師や支援元のアメリカン・ボードと対立し、一八九七年、同志社を去った。

同年、同志社の後輩・大西祝の紹介を得て東京専門学校講師に就任。以後、一九四一年まで四〇年以上の間、早大で教鞭をとった。同時期、大西祝・岸本能武太らの勧誘で丁西倫理会に入会。倫理研究を本格化させた。

また、上京後は論壇での活動も活発化、時事評論・社会評論に健筆をふるった。一九〇九年からは大手総合雑誌『太陽』の主幹を兼務し、『大正デモクラシー』の先駆的論者として重きをなした。

89 浮田の思想は文明の進化論的發展を説くところに特徴があり、個人の人格や生命を尊重する立場から、戦争・植民

地主義・忠君愛国主義教育などの弊害を指摘した。その主張は国策や世論の大勢としばしば対立し、ときに激しい非難にさらされたが、浮田は孤立を厭わず、持論を説き続けた。

早大においては図書館長・高等師範部長・維持員・理事などを歴任。高田早苗、坪内逍遙らと並ぶ功労者として尊敬を集めた。

同志社時代の浮田和民の講義ノート（一八八六年九月頃）

同志社時代の「史学講義」のノート。「歴史ノ領分」は「帝王ノ歴史」でも「戦争ノ歴史」でもなく、「社会全体ノ歴史ナリ」との言葉に、社会や人々の生活に注目する後年の歴史観があらわれている。

早大で浮田は政治学・西洋史・社会学などを長期にわたり担当した。

浮田和民「立憲国ニ於ケル教育ノ方針」草稿（一八九二年頃）

一八九二年一二月、留学先のアメリカから親友・徳富蘇峰の『国民之友』に寄せた同名論説の草稿。同時期に勃発した「教育ト宗教ノ衝突」論争にキリスト教擁護の立場から介入している。

非戦論と「武士道」「挙国一致」への批判

日露戦争の前夜、日本国内に反ロシアの機運が高まる中でも、浮田は好戦的な風潮を危惧し、ロシアとの平和的な交渉を説く、数少ない非戦論者だった。

一九〇四年二月の開戦後も、浮田は、人命を尊重し、社会の倫理的基盤を維持するための現実的選択肢を粘り

強く提起し続けた。

一九〇四年六月、日本軍の輸送艦・常陸丸がロシア艦隊の攻撃により沈没、乗船していた多数の軍人が、捕虜となる事を忌避して自決するという出来事が起きる。それを新聞が「名誉の戦死」と美化し、将兵の生命を軽んずるかのような「武士道精神」が称揚される中、たまらず筆を執った浮田は、いたずらに自分の生命を投げ出すことの不合理を説くとともに、戦時下の異論を許さない「拳国一致」の雰囲気を批判、「少数説」を尊重すべきことを強調した。「捕虜となつたら留学した積りで露西亜^{ロシア}で勉強して帰るが宜い」との発言が報じられると、国家主義的な知識人や軍人等を中心に、浮田に対する「耶蘇教（キリスト教）的個人生存主義」「露探（ロシアのスパイ）の所為^{しよゐ}」といった批難が浴びせられた。それでも浮田は臆することなく繰り返し持論を唱え続けた。

浮田和民「生存主義の道德」（一九〇四年八月）／早稲田大学図書館所蔵

一九〇四年七月、丁酉倫理会で行った講演を文章化したもの。『丁酉倫理会倫理講演集』一九〇四年八月号に掲載。日露戦争が始まると、新聞・雑誌は「名誉の戦死」を盛んに喧伝し、人命を軽んじる風潮が広がりを見せた。その中であつて、浮田は「名誉より道德より人間の生命は貴い」とする「生存主義の道德」を唱え、好戦意識に染まる世論に対し、人命の尊重を説き続けた。

浮田和民講演メモ「日露戦争ト教育」（一九〇四年九月一八日）

東京市教育会主催の講演会で行った講演のメモ。この講演で浮田は持論の「生存主義の道德」を説き、いたずらに戦死を賞揚するような「武士道」精神を批判するとともに、戦時下の言論の不自由と思想弾圧に反対の意志を示した。



【写真】古稀祝賀会当日の市島謙吉・高田早苗・坪内雄蔵（逍遙）・浮田和民（一九二九年一〇月二〇日）

高等師範部長や理事、評議員などを歴任し、長年、早大の運営に尽力した浮田は、高田早苗、坪内雄蔵、市島謙吉という建学の功労者たちと肩を並べる存在だった。

この浮田の主張に対し、井上哲次郎ら国家主義者や軍人、主戦論が支配するジャーナリズムは一斉に攻撃を加えたが、浮田は屈せず、激しい論戦を展開した。

武士道に関する浮田和民のメモ

「武士道」の長所にも触れつつ、「人格ノ価値ヲ輕視ス」「実業ノ發展ニ害アリ」といった短所を列挙している。

『太陽』第一五巻第一〇号（一九〇九年七月）

一九〇九年一月、当時もっとも影響力のあった総合雑誌『太陽』（博文館発行）の主幹に招聘された浮田は、以降、一九一九年まで早大教授と『太陽』主幹を兼務し、同誌で健筆をふるった。

浮田和民「文明協会の趣旨」草稿

一九〇八年、諸種の文化事業を手掛ける啓蒙団

体・大日本文明協会が早稲田大学関係者を中心に設立された。会長・大隈重信のもと、浮田は編輯長に就任し、出版事業の統括役をつとめた。第一次世界大戦後に書かれたこの資料には、「知識を世界に求め」「人民の大学」を目指す同会の趣旨がうたわれている。同会の旗印であり、晩年の大隈のライフワークであった「東西文明の調和」は、浮田の年来の持論でもあった。

【写真】喜寿祝賀会での浮田和民（一九三三年）

丸の内の永楽倶楽部（早大の校友会倶楽部）で催された喜寿祝賀会で謝辞を述べる浮田。

三、安部磯雄（一八六五～一九四九）

安部磯雄は、一八六五年、福岡藩士岡本権之丞の第四子として生まれた。一八七九年、同志社英学校に入学、岸本能武太と同級となり、大西祝とも机を並べた。在学中の一八八二年、新島襄により受洗。一八八五年、徴兵回避のため安部家の養子となった。

一八八七年、金森通倫の後を受けて岡山協会の二代目牧師に就任。有力信徒だった大西祝の叔母・絹らの援助を受けた。

一八九一年、アメリカ・ハートフォード神学校に留学、ついでベルリン大学に進み、一八九五年に帰国した。アメリカで社会事業の実際に触れ、社会主義への関心を深める。また、伝統的な教会を脱し、リベラルな信仰をめざすユニテリアンの思想に傾倒した。

帰国後、一八九七年、同志社中学校に赴任するが、教育・経営方針をめぐる宣言教師、アメリカン・ボードと対立し、一八九九年、辞職した。同年、岸本能武太らの紹介で東京専門学校に転じる。

この頃から、ユニテリアン・社会主義、労働運動など学外の諸運動にも積極的に乗りだし、一九〇一年には片山潜・幸徳秋水らと日本初の社会主義政党・社会民主党を結成した（二日後に結社禁止）。

日露戦争では一貫して非戦論を主張。島田三郎、木下尚江・石川三四郎らとともに平和や女性の人權獲得のための運動を長期にわたり推進した。キリスト教と社会主義の理想を重ね合わせつつ、安部はあくまでも平和的な社会改良をめざし、暴力的・反道徳的な行為には、立場を問わず厳しい態度で臨んだ。

また、早大では高等予科長、政治経済学部長、図書館長、理事等を歴任するかたわら、体育部長や野球部・庭球部の初代部長をつとめるなど、早稲田スポーツの育成に多大な足跡を残した。

一九二四年、無産政党の組織を準備する政治研究会を大山郁夫らとともに結成。一九二六年、社会民衆党の委員長に就任した。以後、衆議院議員として当選四回を数えたが、戦時体制が進展する中、一九四〇年、いわゆる「反軍演説」事件における斎藤隆夫議員除名に反発し、ほどなく議員を辞した。第二次世界大戦後は日本社会党顧問をつとめた。

安部磯雄「社会主義者トシテノ基督^{キリスト}」原稿（一八九九年）

『六合雑誌』一三三二号に掲載された同名論文の原稿。「平民主義」、富の公有、非戦論など、キリスト教と社会主義の共通性を説いている。『六合雑誌』は一八八〇年に東京基督教青年会（東京YMCA）の機関誌として創刊。大西祝や浮田和民も執筆陣に名を連ねた。一八九九年当時、安部は同誌の主筆をつとめていた。



【写真】社会学を講義する安部磯雄（一九二五年頃）

安部磯雄『地上之理想国 瑞西』（一九〇四年五月）

日露戦争の開戦直後、非戦論を主張する幸徳秋水、堺利彦らの平民社から出版したもの。永世中立国であるスイスの事例を紹介しつつ、教育、社会制度、そして戦争反対の持論を説いている。

安部磯雄講義ノート「都市問題 農村問題」

アメリカで資本主義の進展がもたらす社会問題・都市問題を目の当たりにした安部は、この問題の原因究明と解決を学問上の研究テーマとした。早大で社会学を担当した安部は、一九一〇年からは、講義題目に「都市問題」を取りあげた。

安部磯雄『廓清パンフレット 公娼廃止の理由』（一九二四年五月）

東京専門学校着任直後から、安部が熱心に取り組んだのが娼娼運動だった。一九二一年、娼娼運動の統一組織である廓清会が設立されると、安部は副会長に就任。女性の人

権擁護に終生取り組むこととなった。

【写真】早大庭球部員と安部磯雄（一九〇三年二月）

練習に赴いた鎌倉で撮影されたもの。留学先のアメリカでテニスを身につけた安部は、一九〇三年、庭球部の初代部長に就任した。安部の第三子で後に早大教授をつとめた民雄もデビスカップに出場するなど名選手として知られた。

【写真】安部磯雄と慶応義塾大学、早稲田大学の野球部員たち（一九〇七年）

安部を中心に、早稲田側には橋戸信・押川清・河野安通志らの顔がみえる。安部は一九〇一年、早大野球部の初代部長に就任。同部のアメリカ遠征を成功に導くなど、早稲田のみならず日本野球の発展に多大な貢献を果たした。

足尾銅山鉱毒事件と雄弁会の創立

北関東を流れる利根川の支流・渡良瀬川では、一八八〇年頃より、古河市兵衛が経営する足尾銅山から排出された鉱毒の汚染が深刻化、下流域の農村地帯に壊滅的な被害をもたらしていた。日本初の公害問題といわれる足尾銅山鉱毒事件である。

一八九九年一二月、鉱毒事件の解決に奔走する衆議院議員・田中正造が東京専門学校を訪れ、「鉱毒論」と題する演説を行って、被害地の惨状を伝えた。

この田中の訴えに即座に反応したのが安部磯雄だった。同月、安部は同僚の岸本能武太と二人の学生を伴い被害地への実地調査を行うと、自らが主筆をつとめる『六合雑誌』にその結果を報告し、鉱毒事件の解決に向けて

世論の喚起につとめた。

その後、問題の焦点が、栃木県谷中村の遊水池化計画の是非へと移り、世論の関心の低下や、買収工作による切り崩しによって反対運動が衰退する中でも、安部は被害民たちへの支援を粘り強く続けた。

安部らの活動は学生たちの共感を呼び起こし、東京専門学校は鉱毒被害民救援運動の一大拠点となる。一九〇二年一二月、この運動に集った学生たちによって早稲田大学雄弁会が設立されると、大隈重信総裁のもと、安部磯雄は初代会長に就任した。

【写真】早稲田大学雄弁会第一回公開演説会（一九〇四年一月三〇日）

雄弁会第一回公開演説会の際、撮影されたもの。安部磯雄・大隈重信・高田早苗・永井柳太郎とともに、菊池茂、白柳秀湖らが写る

【写真】岸本能武太（一八六六～一九二八）

岡山藩士の子として備前国（現・岡山県）に生まれる。一八八〇年、同志社英学校に入学、安部磯雄、大西祝らと知り合う。一八九〇年、ハーバード大学に進み、遅れて渡米した安部を出迎えている。一八九四年、東京専門学校に着任、主に英語教育を担当した。浮田和民や安部が東京専門学校に着任する際も、岸本の尽力があつたとされる。大西、浮田とは『六合雑誌』編集員を、安部とは足尾鉱毒事件や日本ユニテリアン協会の活動を共にするなど、早稲田を代表するキリスト教社会主義の論者として活躍した。

【写真】安部磯雄と岸本能武太（一八九九年二月）

栃木県足利町（現・足利市）で撮影されたもの。鉱毒被害地への視察の際に撮られたと推定される。安部、岸本、残る二人は同行を志願した武田三重郎（法律学科学学生）ら学生とみられる。

安部磯雄「世人は如何に鉱毒問題を解せんとするか」（一九〇〇年二月）

『六合雑誌』二三〇号に掲載。前年一二月の現地調査をもとに、政府が銅山に予防工事を命じた後も、なお、甚大な被害が発生していることを伝え、解決に向け世論を喚起している。

田中正造書翰福田英子宛（一九〇六年七月三一日）／早稲田大学図書館所蔵

田中正造が、支援者の一人である運動家の福田英子に宛てた書簡。谷中村で発生した洪水被害の状況を伝え、安部にも視察に来るよう促している。当時、安部と福田は平民社の活動や、雑誌『新紀元』の発行などで協力しあう関係にあった。

地所売渡証（一九〇六年一〇月六日）

土地収用に関する書類（一九〇七年五月三〇日）

鉱毒問題は、次第に渡良瀬川の洪水対策へとすりかえられ、栃木県谷中村をとりつぶし、遊水池とする計画が政府によって強行された。安部はこの計画に反対する田中正造の依頼を受け、谷中村に土地を購入し地権者となって抵抗する。しかし、一九〇七年、政府は土地収用法による強制執行を行い、谷中村は廃村に追い込まれた。

この資料は安部が購入した土地の売渡証と、強制収用に際し栃木県が発行した通知書である。

安部磯雄日記（一九二五年）

早大教授を務めるかたわら、一九二四年、安部は政治研究会に参加。無産政党の結成に向け政治活動を開始した。この資料は、その翌年の日記。八月中、朝鮮半島への遊説に赴いた安部は、帰京後、休む間もなく軽井沢の野球部合宿を訪ねている。

【写真】社会民衆党結成準備発起人（一九二六年二月）

左から吉野作造・安部磯雄・堀江婦一。この翌月、安部を委員長として社会民衆党が結党された。

安部磯雄「社会民衆党綱領解説」原稿

一九二八年の第一回男子普通選挙を控え、一九二六年十二月、無産政党・社会民衆党が結党されると、安部は早大の教授職を辞し、委員長に就任した。この資料は『社会民衆党パンフレット』（クララ社、一九二九年）に掲載された綱領解説の自筆原稿。

安部磯雄「質素之生活高遠之理想」

安部直筆の書幅。貧困の根絶を目指し、奢侈をいませめた安部は、この言葉を座右の銘とした。

四、それぞれの留学・西洋経験

キリスト教の精神を身につけ、欧米の学問・思想を専門領域とした大西祝・浮田和民・安部磯雄の三人は、留学を通じて西洋世界を実見した、当時としては数少ない日本人だった。残された史料の中には、彼らが見た西洋の姿と、留学にかける決意が刻まれている。

留学中の大西祝の絵葉書（一八九八年三月～九月）

ヨーロッパ留学中の大西祝が、滞在先から妻・幾子に宛てた絵葉書のうち四枚。寄港地の情景や留学先の大学の様子、鑑賞したオペラの感想などを書き送っている。留学中、大西はヨーロッパの学問や文化を貪欲に吸収していた。

安部磯雄「洋行日記」（一八九一年八月～一八九五年二月）

留学時代の安部の日記。冒頭、現在を「準備の時代」と位置づけ、決意を書きつけている。安部はアメリカ、コネティカット州のハートフォード神学校に三年間在籍し、優秀な成績で卒業。さらにドイツ・ベルリン大学に転じた。安部は後年、早大野球部の遠征を引率するなど、度々アメリカを訪れることになる。

浮田和民の留学時代の覚書（一八九二年九月）

浮田和民は同志社を休職して渡米、イエール大学に在籍し、約一年半の留学生活を送った。浮田はこの資料に、渡

航に際し個人や団体から受けた援助金額を記録している。

五、精神の継承者たち

大西が思想・良心の自由を擁護し、浮田が生命の尊重を唱え、安部が貧困や公害に立ち向かった時、彼らの前に立ちだかったのは、聳立する国家であり、戦争を後押しする圧倒的な世論だった。そして、多くの場合、日本の国家と社会は彼らの望みとは逆の道を選んだ。「進取の精神」の持ち主は、常に、少数者として出発することを余儀なくされる存在だった。

しかし、彼らは永遠の少数派ではなかった。大西の薫陶を受けた島村抱月（一八七二～一九一八）は、二〇世紀初頭、『早稲田文学』を拠点に自然主義運動を主導し、旧来の道徳観・社会観を刷新する役割を担った。浮田和民に学んだ大山郁夫（一八八〇～一九五五）は、大正デモクラシーのオピニオンリーダーとなり、後に安部磯雄と並ぶ無産運動の指導者となった。大西・浮田・安部の先駆的精神は、教え子たちへと引き継がれ、早稲田を大正デモクラシーの一大根拠地たらしめる原動力となった。そのようにして、平和・自由・デモクラシーへの希求は、一九二〇年代の日本の時代精神となっていたのである。

早稲田を発信源の一つとした平和とデモクラシーの時代は、ほどなく軍靴によって踏み荒らされていく。しかし、孤立を怖れない彼らの「進取の精神」は、ひとたび挫折しても、必ず再出発の時が訪れることを、私たちに伝えている。

島村抱月講義草稿「美学」（一九二二年）／早稲田大学図書館所蔵

大西祝の担当科目であった「美学」の講義は、一九〇六年からは教え子の一人で英独留学から帰国した島村抱月が担当した。

朝河貫一書翰浮田和民宛（一九二五年七月一九日）

東京専門学校文学科出身（一八九五年卒）で後にイエール大学教授をつとめた歴史学者・朝河貫一が浮田和民に宛てた書翰。著書を贈られたことへの礼を述べるとともに、当時、アメリカで取りざたされていた日本人移民問題について所見を述べている。朝河は大西祝の弟子のうち、最初に留学を果たした人物だった。朝河の留学資金を援助するため、大西は各方面を奔走したという。

演説レコードの宣伝チラシと大山郁夫の演説要旨

第一回普通選挙を控えた一九二六年、大山郁夫は無産政党・労働農民党の創立に参画、委員長に就任した。教授在職のままの委員長就任は学内で問題化し、結局、翌年、大山は早大を去った。この資料は無産政党党首の演説レコードのチラシと演説要旨。大山と並び社会民衆党委員長・安部磯雄の写真が掲載されている。

【写真】日本帰国後の大山郁夫と安部磯雄（一九四七年）

戦時中、身の危険にさらされた大山郁夫は、一九三三年から一九四七年までアメリカで事実上の亡命生活を送った。写真は戦後、帰国した大山が最晩年の安部と撮影したもの。

六、教え子たちの回想から

大西祝・浮田和民・安部磯雄に教えを受けた早大生たちは、後年、折に触れて亡き師の思い出を語った。教え子たちの脳裏に刻まれたその面影から、彼らの人となりになる。

「大西さんが教場に現はれて講義をされる時には何時とはなしに熱誠が加わる、ホンノリと顔が赤くなる、哲学の中にも感情が燃えて来るのである。例えば論理学の如きは誰が聞いても面倒臭い、手数のかかるいやな学科の一つである。それにもかかわらず大西さんの論理学だけは皆が興味をもつて黙って聴いたものだ。熱誠があらゆる学科を捉えて生命あるものとならしめた事の一証となる。」

（島村抱月「大西祝氏」『中央公論』一九〇七年二月）

「私が学校を出てからまだ一二年後だと思う、……夕方、しかも寒い時分に〔大西祝が〕突然私を尋ねられて、「君は将来如何するつもりか」という談があつた。当時はまだ私には何をしたら宜いか分らぬので、学問をしたいとは思ふが学者として果して世に立てるか分らぬ時代である。で「出来れば人生について真面目に研究し、自分だけでも安心がしたい」という様なことを答えた。するととつさに「出来れば」という語を捉えて、「それは悪い、出来ると言いたまえ、出来るといえは宜いのだ、……志立って道ははじめて行われる。以来は出来るならばなどという語は人の前を言うてはならぬ。実際出来ぬと思つても黙つて居るが宜い。口から外に出すべき語ではない」と言われた。」

（金子筑水「大西博士の一面の性格」『中央公論』一九〇七年二月）

「浮田先生はわれわれの史学科では、西洋史の概説を講じていられた。同志社で育ち、米国のエール大学に学び、早稲田の学問の独立と自由の伝統を慕って教授となった先生が、文部省の臍的な監督と干渉を喜ばなかったことはいうまでもない。日に増しやかましく、こまかくなってくる教育方針には堪えられないこともあつたらしい。ある日の授業前に、先生は

「どうも、文部省で段々やかましく干渉するには困る、それで心ならずも、くだらぬ学科を設け、型にはまつた施設や試験などもやらねばならない。どうです諸君、諸君さへしようちならば、文部省の免状などはけとぼしてしまおうではないか」

と、諸学生を見わたしたが、学生も衷心先生の意気を痛快としながらも、進んで意見を述べるものもない。先生はやがて思い直したかのごとく、

「まあ、免状もあるにましましたことはないからな——」

と、やがて平素のごとく講義をつづけられたこともあつた。

……先生数十年の講壇の感化が、早稲田の伝統的学風、自由独立の精神に貢献し、学園の基礎を作つたという暝々の功績は、他の誰にも劣らぬものがあつたと思う。」（渡邊幾次郎「浮田先生を想う」『浮田和民先生追懷録』一九四八年）

「門下の一人として私の眼底に浮ぶ（浮田和民）先生は形式を越えたクリスチャンである。物やさしい村夫子然たる先生ではあつたが、文字通り外柔内剛、自由民権の鉄腸の自由人であられた。この一線に触れると先生は頑強無比の闘士になられた。この点は『太陽』の主幹としての先生の文章に最もよく表われている。……毎号巻頭を飾る「浮田和民」の論文は論題多彩、思想高邁、達意の文章を以て、当時の呼びものであつた。蘊蓄と自信に油の乗つた当時の

先生の批判は、その独特の史眼を以て宗教文芸政治など広く各方面にわたって自由に展開せられ、民衆の啓発指導の先頭に立つの観があった。」

〔阿部賢一「自由民権の学父浮田先生」『浮田和民先生追懷録』一九四八年〕

「〔安部磯雄〕先生は講義された英語の他に、否、使用していた英語の教科書に書いてあること以外に、何一つ講釈されたり、お講義をされたり、気焰を上げられたりしたことは、唯の一度もありませんでした。……左手に教科書を持ち、右手は軽く腰のあたりの背後に廻し、時々、太い左の眉を心持ち動かすだけで、厚い唇から平明な、微塵だもケレンの嫌味を交えて居ない淡青な音声が、心持ちよく諄々として続く。これが教室における先生の一切であり、いや学校に於ける先生の全体でした。先生の挙動には、それ以外の何ものもなく、先生の言葉には、その他の一片の説教も講釈も、一かけの気焰も不平もありませんでした。」

〔権田保之助「安部先生と私」安部磯雄『地上之理想国 瑞西』復刻版、第一出版、一九四七年解説文〕

「安部先生は高等予科で経済学の原書を、大学で都市政策などの講義をされていたので、私は専門部から学友といっしよにときどき講義の盗聴に出かけた。学生の情熱をおおるような華麗な講義ではなかったが、幸徳事件の余波を煙山專太郎教授と共にうけた先生は、講義においてはひるむところなく「かかるが故に私は社会主義者である」と言い放った。私などはそれを聞くと神経がピリピリとふるえたものだ。直接、先生の教えをうけた私の学友たちは意地悪い質問を持って先生のお宅を訪ねたことがあっても、先生はじゅんじゅんと懇切に説明されるので、その誠実さに打たれた、と私に話したことがある。そのとおりであったであろう。」

〔鈴木茂三郎「ほんとうの教育者はと問われて」『朝日新聞』一九六八年二月二六日〕

「〔野球部の第一回米国遠征の後〕多くの新知識という貴重な土産を持ち帰った早大チームは、安部先生の方針に従って、まず好敵手たる慶応野球部を招き新知識を披露した後、各地で講習会を開いて、これを広く伝えたのである。……とかく新知識というものは、秘めて置きたいものであるが、先生はこの独占を許されず、これを多くの野球人に伝えて、同じ条件のもとに勝負を争う、というスポーツマンシップの真髓を教えられたのであった。」

（伊丹安広『野球の父 安部磯雄先生』早稲田大学出版部、一九六五年）

※適宜、現代かな遣いに修正し、句読点を補った。

※本展示の図録は、大学史資料センターのウェブサイトにて閲覧が可能である。ウェブサイトのURLは左の通り。

<https://www.waseda.jp/culture/archives/>